

日本語と中国語における 「利と損」に関する諺の対照比較研究

銭 清

1 はじめに

一般に、言語表現から、その言語を使用する民族集団の文化の特色を見て取ることができ、特に、日常生活の中から生まれ、民衆の智慧の結晶として使われてきた諺は、各民族それぞれの伝統的な物の見方・考え方を濃厚に反映している。「利と損」に関しては、古来多くの諺、格言が伝えられている。これらの諺には、多年にわたる人々の生活の姿や考え方が示されており、「利と損」に関して多くのことが言われているのは、人々の生活との深い関わりを示すものにほかならない。日中両言語には、そうした様々な「利と損」に関する諺を見ることができる。

そこで、本稿では、「利と損」が使われている両国の諺に着目して、諺に見られる共通点と相違点を明らかにし、日本と中国の風俗、文化、民衆の考え方を考察する。

2 分析資料と方法

本研究の対象として取り扱うのは、日中両言語における「利と損」に関する諺である。日本の諺の用例は『故事俗信諺大辞典』(小学館 1982)を資料母体とした。一方、中国の諺は、『中国諺語大全』(温 2004)と『諺語大典』(張 2004)の資料を中心に、諺の用例を取り出した。『中国諺語大全』は、約 100,000 項目の諺を収録している。古今の文学作品からの用例や古代文献及び方言からの引用もあり、内容的にも、詳しい例文を加え、難解の語彙についても解釈が付いている。また『諺語大典』は、内容としては、46 テーマ、308 項目に細かく分類され、中国語の諺への理解もいっそう深まるように作られている。

考察方法としては、上述の諺辞典から「利と損」に関する諺を取り上げそれぞれの諺の意味内容と表現を対照比較する。両国の諺を対照しやすくするために、日本語の諺には「J」、中国の諺には「C」という符号をつけ、筆者の直訳を付す。

3 利があれば損もある

永野 (1979: 197) は、儲けるとは商取引で利益を得ることであるが、不確実、予測できない面があると述べている。この予測できない面は次の諺から見ることができる。

- (日) J1 禍と福と門を同じゅうし利と害と隣を為す
- (中) C1 祸与福同门、利与害为邻
禍と福と門を同じゅうし利と害と隣を為す
- C2 利害利害、有利有害
利害は利もあり害もある
- C3 有得必有失
利益があれば必ず損失もある
- C4 有利必有弊
利益があれば必ず弊害もある

- C5 有果必有因、有利必有害
結果があれば必ず原因もある、利益があれば必ず損害もある
- C6 有胜就有败、有利就有害
勝利があれば失敗もある、利益があれば損害もある
- C7 人见利不见害、鱼见食不见钩
人は利を見て害を見ず、魚は餌を見て鉤を見ず
- C8 利弊之间、恒其大者
利益と弊害の中、大物を考慮する

上から分かるように、中国の諺は、利の中に害を見、損の中に得を見るという、ものを二面的に捉える考え方が見られる。また、C5 と C6 から、人事のすべては、因と果と関係があり、果を結ぶにいたることがあらかじめ定まっているという仏教思想も窺える。当然利と損の関係においてもこの法則に当てはまっている。C7 は面白い比喩表現でこの利害関係がわからない人間の様子を語っている。この因果関係の中で、C8 の利と損どちらをとるべきかについては「大物を考慮することにしよう」という方法を教えてくれる。

3.1 利益ばかりを求める

「人間生まれながらにして欲求を持ち、生育と共にさらにいろいろな種類の欲求を習得的に累積させていく、この欲求あるが故に行動があるという説明もできる」と穴田(1982: 50) が述べているように、欲求は人間が長生きするのに従い、どんどん増えていくのである。一定の段階においてのレベルは一定の欲求によって、満足させていないと、人間は求め続けていくだろうと思われる。欲求、欲望は様々な類型がある。利益ばかり求めることはその中の一つである。

- (日) J2 唯利を是視る
J3 利に耽る
J4 利を追う
J5 利の在る所皆黃諸たり
J6 利を好む人は色を好むより多し
J7 こっちの餅は売れば利がある
J8 儲けぬ前の胸算用
- (中) C9 唯利是图
唯利を其れを見る
C10 利之所在、无所不趋
利のある所は人の赴く処になり
C11 人无利息、谁肯早起
人は利無ければ朝早く起きず
C12 有利能成好朋友、无利路遇不点头
利益があればいい友人になる、利益がなければ道で会っても顔かない
C13 干大事而惜身儿、见小利而忘命
大事をなすには身を惜しみ、小利を見て命を忘れる

J2、J3、J4、J5 と C9、C10 のように、両国ともに利益の追求に没頭することが語られている諺である。おそらくこれに類する諺はほとんど世界各国で共通なのではないかと思われる。J2 と C9 は表現的にも意味内容も同じである。『故事・俗信ことわざ大辞典』によると、この諺の出典は中国である。つまり、この諺はもともと中国から日本に伝来してきたものである。J5 のほんしよは、孟と專諸を指している。孟は中国古代の力士、專諸

は呉王僚の勇士である。人はだれでも自分の利益となる場合は孟や專諸のようになるものであると語っている。J5 と C10 は意味的には相通じるところがある。つまり、利のあるところは人の赴く処になり、自分の利を追うときはだれでも勇敢になるものだということを示唆している。そのほか、中国の諺では、具体的に利益のために行動する人間の姿を描いている。利益と勤勉、利益と人間関係、利益と命などに深く関わることは C11、C12、C13 から見ることができる。C12 は中国の「有钱能成好朋友、无钱路遇不点头（金あれば友人になる、なければたとえ道であっても挨拶しない）」という諺と、思想的には同じである。これらの諺から、金銭、利益の前に、浅ましい人情の弱点がわかった。金子（1983：283-284）が「諺の思想的基盤は、なんと言っても現実主義的な傾向が圧倒的に著しい。これは実際の経験の中に養われたものであるから、もとより当然である」と指摘しているように、以上の諺では、日中ともに利を重んじている考え方が窺える。大事をなすには身を惜しんで為すことをせず、どんな小さなことでも自分の利益になると見れば一命をも忘れてこれに飛びつく。表現からみると、中国の諺のほうが利益と勤勉、利益と人間関係、利益と命という面から具体的に描いているものが目立つ。友情や信義からではなく、利益のために交際する浅ましい人情の弱点が窺える。

3.2 利より大切なもの

(日) J9 生を重んずれば即ち利を軽んず

J10 利を取るより名を取れ

(中) C14 重生则轻利

生を重んずれば即ち利を軽んず

J9 と C14 は表現も意味内容も同じもので、これはもともと中国から伝来した諺である。生命を重んずるならば、生命を害するところの利欲は二つの次にするということを表している。「利益より名誉と命を重んずべきだ」という考え方について、奥津（2000:97）は「日本には『生恥』という言葉があるように、恥を感じて生き長らえるよりは死を選ぶのが日本人のとるべき道であった。『義理』には『世間に対する義理』と『名に対する義理』の二つがある。後者は『名誉』にほぼ等しい観念であり、この「名に対する義理」を守れず恥をかいた場合には自ら死を選ぶか、場合によっては復讐という手段によってその汚名をそそぐ義務が日本人にはある。」と述べている。

4 義と利

「財も富も自分の体の外のものである」という言葉は周知の通りである。しかし、いざ金や財富に関わる損得に直面すると、このような気持ちで対処するのはそれほど簡単ではない。君子と商人が利益の前で、どのような態度をとるかについては、次のような諺がある。

(日) J11 君子は義に喻り小人は利に喻る

J12 その誼を正し其の利を謀らず

J13 利を見て義を思う

J14 義を後にして利を先にすれば奪わずんば厭かず

J15 国は利を以って利と為さず

J16 利して利する勿れ

(中) C15 君子喻于义、小人喻于利

君子は義に喻り小人は利に喻る

C16 重义如泰山、轻利如鸿毛

義を重んじることは泰山の如く、利を軽んじることは鴻毛の如く

- C17 見利思义
利を見て義を思う
- C18 利动君子、义动小人
利益は小人の心を動かせる 義は君子の心を動かせる
- C19 唯利是图者、胸中无美德
ひたすら利益を追求する者は、心の中に美德がない

ここで注目したいのは、J11～J16 はすべて中国から伝来した諺である。J11 と C15、J13 と C17 の対応は、内容的には見事一致している。物事に当たって、君子はすぐにそれが正義であるかどうかを考えるが、小人はすぐに利益になるかどうかと考えるということを表している。君子は道義に敏感であり、小人は利益に敏感であることがわかる。また、J205 のように、一国の君主として、道義よりも利益を重んじると、上下互いに利を奪い合い、相手のものを全部奪い尽くさなければ満足しなくなる。結局、国家の利益とならないのである。J15、J16 からわかるように、「個人の利益」よりも「国家の利益」を優先させ、そこにこそ日本の「義利」観の特徴があったといえるのである。

C16 の「泰山」は中国五岳の一つである。中国第一の名山とされ、古来封禪の礼（天子が行う天地の祭り）が行われた名山として知られている。「鴻毛」は非常に軽い物事のたとえである。この諺は「泰山」と「鴻毛」を用い、「義を重んじること」と「利を軽んじること」はどれほど重要であるかを比喩的に示唆している。また、利益ばかりを追求する者に対する批判は C19 から見られる。金儲けのことしか考えず、金儲けのために人を騙し、義に害することをするのは恥ずべき商人である。このような悪商人は金がいくらあっても軽蔑される。

于（2009:73）「西洋の文化伝播によって近代化の概念がもたらされる以前、中国や日本をはじめとする東アジアの伝統的な経済思想の中核には、儒学の『義利の弁』があった。『義』は道義、正義のことで、『利』は功利、利益、とりわけ私利を指している。儒学は元々『修身齐家治国平天下』という支配者の官学としての性格の強かった学問であり、『重义轻利』思想は士農工商の身分制と結びつき、賤商意識の論理的な基礎をなしていた。商業の発展を追求する上でこの賤商思想は障害となっており、経済の近代化の過程で『義』と『利』との関係を如何に処理するかは、商人たちが直面した共通の課題であったといえる。」と述べている。

5 利と災い

利益と災いはいどのような関連性があるかについて次のような諺を見てみよう。

- (日) J17 利を営む者は患い多く、諾を軽んずる者は信寡し
J18 利施す者は福報い、怨み往く者は禍来たる
- (中) C20 貪利割着手
利益をむさぼると手が切られる
- C21 利令智昏、勢令智昏、位令智昏、色令智昏、怒令智昏
利は智慧に混乱させる、権勢は智慧に混乱させる、地位は智慧に混乱させる、色欲は智慧に混乱させる、怒りは智慧に混乱させる
- C22 利之藪、怨之府
利の集まる所は人の怨みをうける所なる

上の諺からわかるように、利益ばかり考えている者は悪い事がふりかかるということを示したものが最も多く、利益を食ることに対する戒めを表した意も多少含まれている。日本語の諺は利益ばかり考えている者は心配事が絶えず、安請け合いをする者は信用がおけ

ないと断じている。C20は利益を得ることにいちずにつとめると手が切られるというユニークな比喩表現が使われている。また、「利益は智恵に混乱させる」、「人の怨みをうける」など、利を貪ることを批判する諺も見られる。J18は、仏教思想の影響も及んでいると考えられる。人の利となることをしてやればその善行のむくいとして自身にも福がもたらされる。人の怨みを買うようなことをすれば、自身にも禍がふりかかる。C22の「藪」は人と金銭など集まる所である。自分の利益ばかり考えて行動すれば害を受ける者が出て、人から怨みをうけることになることを表している。

6 利益をもたらす方法

6.1 損は儲けのはじめ

- (日) J19 損は儲けのはじめ
J20 損をして利を見よう
J21 損をせねば儲けもない
J22 損して得取る
J23 一二分軽いは取り方の損と知れ
- (中) C23 小利不让、大利不得
小利を譲らなければ、大利をもらえない
C24 不花金弾子、打不住银凤凰
金の鉄砲玉を使わないと、銀の鳳凰を撃つことができない
C25 不会蚀本、就不会赚钱
損がなければ、儲けもない
C26 无亏不盈、无坡不平
損失がなければ利益を得ることができない
C27 吃亏不算傻、让人不算笨
損をすることは愚と見なされず、人に譲ることも馬鹿と見なされず
C28 吃亏长见识
損をすることは見識を増やすこと
C29 吃亏算便宜、跌跤算运气
損をすることはうまい汁を吸うことと見なすことができ、転ぶことも運と見なすことができる
C30 吃亏吃不死人
たとえ損をしても人は死なない
C31 吃亏是福、难得糊涂
損をすることは福だ、たまにとぼけるべきだ
C32 吃亏人好做、当时难过
損をする人になりやすいが、損をする当時はつらい
C33 吃亏占便宜、全在一张嘴
損をするのも得をするのもすべて口による

日中の諺ともに、次のような考え方が見られる。商売の基本は、はじめは損をしておいで、将来のより大きな利益を考えることにあるから、損をすることはもうけること、すなわち、商売のはじめである。損失を恐れていると、大もうけはできない。裏を返せば、商売で儲けようと思ったら、ある程度の損は覚悟しなければならないということにもなる。前節3の部分で述べたように、すべてのことには一利一害があるところから、目の前の利得にあまり左右されることなく、長い目で判断を下すことが肝要なことを教えている。C30

～C33 の「吃亏」は損をする、「便宜」はうまいこと、甘い汁である。損せぬ者にもうけなしを表している。

「損失を恐れている、もうけはできない」であることは両国の諺に共通に見られる認識と言えるものの、「損もいい所がある」ということに関しては多少の相違点が指摘される。日本の諺の場合は、「損は儲けのはじめ」としか捉えていないのに対して、中国の諺の場合は他の視角で捉えているものも比較的多く現れている。つまり、「見識を増やす」、「うまい汁を吸うと見なす」、「損をすることは福」などである。簡単に言えば、「我慢すればお金をもうけることができる、そうしないと二人とも損をする」ということである。「損はいい所もある」という考え方に対して、C32 のように「損をする人になりやすいが、損をする当時がつらい」とつらい心境を語る物もある。このようなつらい時、どのようにすればよいかについては C33 が教えてくれる。中国では、もともと「言多必失（言葉数が多いと失言を免れない）」という言葉がある。C33 はまさにこの言葉通りである。

以上の諺は主に商売をする時に用いられるが、どんなトラブルがあっても、穏便に解決したほうがよい結果を生むと人を勧告する時にも用いられる。もし小さい利益を儲けるために、相手との間を破れば、もっと大きな損失を招くおそれがあるからである。日本の諺にも「笑う門には福来る」というのがある。従って、これらの諺から、日中両国の人がトラブルに対処する態度がわかる。日本人であれ、中国人であれ、両方とも和を大切にしようだということがわかる。

6.2 小利に目がくらんで大利を失う

(日) J24 小利大損

J25 小利は大利の残い

J26 利を争うこと蚤甲の如くにして其の掌を失う

J27 身を以って利に殉ず

J28 一文借しみの百損。

J29 一果腐り万果損ず

J30 一枝を切りて百枝を損ず

J31 一桃腐り百桃損ず

(中) C34 貪小利、亏大本

小利をむさぼると、元手に食い込む

C35 占小便宜吃大亏

小利のため大損をする

C36 贪图小利、难成大事

小利をむさぼると、重要な事柄がなりがたい

C37 一颗老鼠屎、坏了一锅汤

一つの鼠の糞ですべてのスープが腐る

C38 一把毛毛虫坏仓粮、一粒老鼠屎坏锅汤

一握りの毛虫で倉庫の穀物がすべてだめになる、一つの鼠の糞ですべてのスープが腐る

C39 一只苍蝇坏一锅汤

一匹のハエですべてのスープが腐る

C40 一个烂萝卜带坏一锅汤

一つの腐った大根ですべてのスープが腐る

C41 一个坏螺带坏一锅汤

一つの腐っているニシですべてのスープが腐る

J26の蚤甲は、爪の甲のことを指し、小さなものたとえである。比喩的に爪の甲のような小さい利益を争って、手のひらのような大きい利益を失う、小さな利益が目くらんで争い、大きな利益を失うことを表現している。以上の諺はいずれも小さな利益にばかりこだわって、結局大きな損失を招くことを反映している。J29～J31とC37～C41は一つの悪が他に多大な影響を及ぼすことが現れている。利益ももちろん大切に違いないが、一個の損失にこだわってすべての物まで失うよりも、一個だけ失うほうがはるかにましである。どうせ損失が避けられないのなら、できるだけ小さく抑え、他に被害が及ばないようにすべきだという戒めが含まれている。内容面においても面白く描写されている。

6.3 その他

- (日) J32 利によりて便に乗ず
 J33 仁人の言其の利博し
 J34 利は天より着たらず
 J35 大利は利ならず
 J36 利が利を生む
 J37 利は本にあり
 J38 利は百倍に非ずんば古代の法を変ぜざれ
 J39 利は向上になかれ
 J40 利を思うより費を省け
 J41 得も損も算盤珠
 J42 得を取るより損するな。
 J43 年寄り使わにゃ損じゃ
 J44 貰い物に損はない
 J45 笑って損した者なし
 J46 朝起きと早作とは損した者がなし
 J47 損した港に船繫げ
- (中) C42 利薄財源廣、貨好迎客心
 利益少なくして財源が広くなる、商品よくして客の心が得られる
 C43 利没二分細、商人勿开店
 利が細かく計算られなければ、商人は店を開くな
 C44 得利不可再往
 利益を得たらもっと得ようと思うな
 C45 有利无利、莫离行市
 利益があるかないかに関わらず市を離すな
 C46 求名在朝、求利在市
 官を求めるなら朝廷で、利益を求めるなら市場で
 C47 无本不能求利
 元手がなければ利益を求めることはできない

利益をもたらすために商人にあったほうが良い性質及び行動として、日本語の諺では、機会、知識、情報、努力、資本、節約、人使い、楽観的な態度などが提示されているが、これに対して中国語の諺では、薄利、算段、市場の重要性、資本などが見られる。

7 損の捉え方

- (日) J48 損と傷は癒え合う
 J49 損と身の祈禱はせぬ者なし

J50 損のいくときはあてが無い

J48は損は傷のように、いつか元通りになおるものであることを表している。損は取り返しのつかないものではなく、いつの間にか埋め合わせがついているものである。一方、この考え方とは異なり、運の悪い時は、自分の行動すべてが損に結びつくという消極的な考え方もある。このように、諺の中に存在する正反対な内容に関し、丸野(2004:34)は諺の一つの特徴として、正反対の生き方や考え方をうたっているのであると強調し、次のように述べている。「どちらかが誤っているというわけでもなし、矛盾しているわけでもない。正反対にうたわれている内容は、同一状況や心理状態という同一平面上の心の動きではなく、異なる状況や事態での異なる側面での心理状態を表した表現したものである。私たちが生きている現実世界は、一筋縄ではいかない多面的な見方や感じ方や生き方が飛び交う複雑な世界であり、それぞれの状況で複雑な人間の心の揺れ動きに細かく即応しようとするれば、おのずの表の理論や裏の理論が成り立つ。」

いずれにせよ、J49で示されるように、世の中わが身の安全を祈らない者はいないのである。

7.1 損の形

7.1.1 交際に損

- (日) J51 会えば五里の損がゆく
- J52 建て元がいつも損する
- J53 宿味噌木損

J51は大阪地方の言葉である。人と人の交際には必ず費用がかかるものである。J52とJ53は交際の際に、具体的な損の原因を表している。催し物や興行は、主催者、また、会場に自分の家を提供するような人が、味噌、たき木をはじめ食糧や燃料をあれこれ使われて、あるいは経費の不足分を自腹で負担することになり、結局損をするのが常である。一方、このような中国語の諺は見当たらなかった。

7.1.2 悪習慣

日常生活の中で特に意識されることもなく繰り返される習慣は、いつの間にか生まれ持った性質と区別がつかないほど抜き難いものとなる。長い間の習慣は、変えようと思っても急に換えられるものではない。次のような悪習慣が損と見なされている。

- (日) J54 朝寝ハ石の損
- J55 酔いに十の損あり
- J56 酒は少しく飲めば益多く、多く飲めば損多し
- J57 急げば損をする
- J58 いわぬが損
- J59 買われた喧嘩は七分の損
- J60 騒げば三文の損

曙光が金色に輝いて見えるように、朝早い時間には大きな価値がある。そのため、早起して仕事や勉強に精を出せば何かよいことがあり、必ず報われる。商売には、商売には怠けは禁物なのである。J54は朝寝をする者は損失が多いことを表している。今日のように電気などない昔では、戸外の労働はほぼ日中に限られ、社会全般も朝型であったため、早起きが奨励されるのも当然である。朝寝していたのでは仕事にならないのである。また、酒を飲むと、人間は悪事を働く行動に出るため、酒に酔うと失敗や損失が多いことを言っているものもある。J58は道理があるのに十分に言わずに黙っていると、かえって不利になるということである。J59からわかるように、喧嘩はまた損を招いてくる。腹を立てる

と、冷静な判断力が失われ、見えるものも見えず、何をやってもうまくいかないのである。

7.1.3 その他

- (日) J61 知らぬ事には損多し
J62 好いた事はせぬが損
J63 死ぬ者は損
J64 貧すりゃ損する
J65 算盤を跨ぐと損をする
J66 満は損を招く
(中) C48 謙受益、満招損
謙遜は得をする、うぬぼれは損を招く
C49 越穷越吃亏、越冷越撒尿
貧乏して困れば困るほど損をする、冷えれば冷えるほど小便が出る

その他、損と思われることを挙げると、日本語の場合では、「やりつけないことに手を出す」、「好きなことをしない」、「死んだ者」、「貧乏すること」、「商売道具を壊すこと」、「自惚れること」のようなことが見られるのに対し、中国語の諺は日本語の諺に比べて、それほど多くないが、「自惚れること」と「貧乏する」ことで共通している。J66 と C48 は同じ諺であり、中国から伝わってきたものである。自惚れることを戒める名言として知られている。貧乏と損の関連性を考えると、貧乏すると頭の動きまで鈍くなり、損を重ねるようになると思われている。

中でも、死んだ者が一番の損である。死んだ人は忘れられるだけであるし、死後のむごい仕打ちにも抗弁できない。生きていれば、どんなよい目に会わぬとも限らないのに、死んでしまっただけはおしまいなのである。人生は長くない、はかりがたいものであり、生は必ず死によって終止符が打たれ、そこで終わりになるか、人間はやはり生きていほうが得である。J63 から、人間の生命に対する執着心も感じ取れる。

8 終わりに

以上、日本語と中国語の「利と損」に関する諺の内容を対照比較し、そこに見られる日本人と中国人の「利と損」に対する考え方の類似点と相違点を明らかにすることを試みた。

日中ともに利を重んじている考え方があり、大事をなすには身を惜しんで為すことをせず、どんな小さなことでも自分の利益になると見れば一命をも忘れてこれに飛びつく。金銭、利益の前に、浅ましい人情の弱点がわかった。表現からみると、中国の諺のほうが利益と勤勉、利益と人間関係、利益と命という面から具体的に描いているものが目立つ。中国の諺は、利の中に害を見、損の中に得を見するというものを二面的に捉える考え方が見られる。これはやはり人事のすべては、因と果との関係があり、果を結ぶにいたることがあらかじめ定まっているという仏教思想の影響といえよう。「唯利を是視る」という考え方が一方、利益ばかり考えている者には悪い事がふりかかるということを示したのも両国の諺の中から現れて、利益を貪ることに対する戒めについて同様な考え方が窺える。また、利益より大切なものとして、日中ともに「命」が挙げられている。相違点としては、日本語の場合、「利益より名誉を重んずべきだ」という考え方が指摘されている。ここから日本人はいかに自分の名誉を重視するかが窺える。義と利への言及については、君子と小人の態度の違いという視点から述べている諺は両国ともにあるが、日本は「個人の利益」よりも「国家の利益」を優先させるという特徴があると示唆されている。

利益をもたらす方法として、「損は儲けのはじめ」、「小利大損」など同様な考え方が見

られる。利益をもたらすために商人にあったほうがいい性質及び行動としては、日本語の諺では、機会、知識、情報、努力、資本、儉約、人使い、楽観的な態度などが提示されているが、これに対して中国語の諺では、薄利、算段、市場の重要性、資本などが見られる。

損と思われることをまとめてみると、日本語の場合は、「交際に損」、「悪習慣」、「やりつけないことに手を出す」、「好きなことをしない」、「死んだ者」、「貧乏すること」、「商売道具を壊すこと」、「自惚れること」のようなことが見られるのに対し、中国語の諺は日本語の諺に比べて、それほど多くないが、「自惚れること」と「貧乏すること」で一致している。これについての諺の出典が中国であることから、中国語の諺は日本社会の考え方に影響を及ぼしていることがわかった。

参考文献

- 穴田義孝 (1982) 『ことわざ社会心理学』 人間の科学社
- 浮田三郎 (1987) 「日本語とビルマ語の諺対照比較研究 (2) - 日本語・日本文化の教材基礎 -」 『広島大学教育学部紀要』 第 2 部 第 36 号 広島大学教育学部 pp. 301-312
- 浮田三郎 (2002) 「日本語と現代ギリシア語における「友」に関する諺対照比較」 『言語学論集』 溪水社 pp. 121-135
- 浮田三郎 (2005) 「現代ギリシア語と日本語における金持ちと貧乏に関する諺の対照研究」 『プロピレア』 第 17 号 日本ギリシア語ギリシア文学会 pp. 3-12
- 于 臣 (2009) 「近代日中両国の商業教育の特徴に関する一考察：福沢諭吉の教育構想における「公・私」観を中心に」 『東アジア文化交渉研究 2』 関西大学 pp. 81-93
- 温 端政 (2004) 『中国諺語大全』 上海辞書出版社
- 奥津文夫 (2000) 『日英ことわざの比較文化』 大修館書店
- 金子武雄 (1983) 『日本のことわざ 評論』 海燕書房
- 尚学図書 (1982) 『故事俗信諺大辞典』 小学館
- 張 一鵬 (2004) 『諺語大典』 漢語大辞典出版社
- 丸野俊一 (2004) 「ことわざに学ぶこころ」 『家庭科教育』 第52号巻8号慶應義塾大学 pp. 32-39
- 永野賢 (1979) 『ことばの風俗誌』 教育出版社 p. 197